

岐阜県美濃市 旧片知小学校

文化施設として活用（美濃和紙用具ミュージアムふくべ）

◆施設の基本情報

建築年度	1987（昭和62）年度
廃校年度	2002（平成14）年度
活用開始年度	2018（平成30）年度
改修にかかった費用	約0.8億円 （うち自治体負担：約0.5億円）
改修に際して利用した国の補助金制度	地方創生交付金 （所管：内閣府）
活用後施設名	美濃和紙用具ミュージアムふくべ
活用事業者名	美濃市（転用）
利用者数/年	約1,000名以上（平成30年7～12月）
主な利用者層	小学生、中高年、研究者

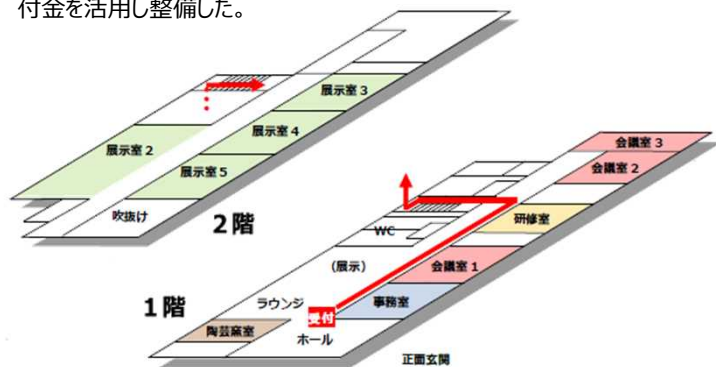


◆施設の概要

美濃和紙用具類の展示・公開を行うミュージアムとし、美濃和紙の里会館と連携し小さな歴史観光拠点施設として活用する。美濃和紙産業を支える技術には、紙漉きの技術だけではなく、紙漉きに使われる用具製作技術の継承も重要であり、後世に伝えるべき技術である。現在、市では江戸時代以降の手漉き用具の収集を行っており、桁、簾、舟（桶）、ねべし籠、ねべし簍、生糸撚り機、明治以降に生産された和紙製品等を収集している。こうした歴史資料を観光施設に活用し美濃和紙産業を支えた用具類の展示ミュージアムとして、和紙の生産地牧谷に第2の観光拠点を設置する。また、用具製作支援施設の機能及び地域交流センターとしての機能を併せ持つ施設とした。

◆廃校活用までの経緯

2002（平成14）年度に旧片知小学校が廃校となり、2003（平成15）年度から片知生涯学習センターとして地域住民の集う場として活用してきた。平成21年度から実施している市内に点在している紙漉き用具や民具類を収集・整理を実施してきたが、市民から寄贈を受けた約5千点の中には、明治初期に製作された美濃判の簀桁や「あんどん」と呼ばれた岐阜提灯用の簀桁など今では貴重で価値の高い用具類があり、こうした歴史的資料の展示・保管・活用や美濃和紙用具製作職人の育成施設が必要と考え、地方創生交付金を活用し整備した。



活用に成功した理由

旧片知小学校が位置する牧谷地区は、中世からの美濃和紙の生産地である。地域住民の大半は昭和50年代頃まで美濃和紙の生産を行っており、貴重な美濃和紙製作用具の展示・保管・調査に理解があった。また、用具製作職人の育成の場として研修室等を設置し活用頂いている。また、岐阜県内では、伝統工芸である美濃和紙が小学校社会科副読本に記載されており、社会科研修で多くの小学生が研修に訪れています。



◆廃校活用に関する独自の取組

本市では毎年、ユネスコの付属機関である文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）と東京文化財研究所が共同開催する「紙の国際研修」の現地研修が開催されている2019（平成31）年度以降に国際研修の場として実施できるよう調整を行っている。

◆廃校活用のメリット

旧小学校を活用するメリットは、空間構成を広く活用できたことである。展示品は大型の用具類も多数あることから、入館者の動線を考え、吹き抜けのエントランス構造やラウンジとして活用でき、また各教室スペースも研修室、事務室、会議室を確保でき、展示エリアは各教室入口戸を廃し、展示空間を有効に活用できた。また、美濃和紙用具製作技術の育成施設でもあるため、漉き簀の製作に使用される生糸の撚り作業には、20m程の長大な室内空間が必要となり、この空間を確保できるメリットもあった。

自治体の声

江戸時代からの美濃和紙産業を支えた用具類や民具を常設的に展示・活用できる施設を開設できたことにより、今後和紙用具類の文化財指定を行う予定である。また美濃和紙用具製作技術保存会などの用具製作技術者や県立森林文化アカデミーとの連携を強化し、技術継承の施設として活用していく予定である。

施設スタッフや利用者からの声

展示施設、地域コミュニティ施設、研修施設など複合施設として活用しているが、廃校となった小学校を地域の活性化の中心としてリノベーションできたことは地域の宝となった。また、片知地区はボルダリングでも全国で有数の知名度があり、今回の施設改修が行われなかった体育館等を使い、屋内ボルダリング施設として改修できないか検討していただきたい。

ひがしおうみし まんどころ

滋賀県東近江市 旧政所小学校

文化研修施設として活用 (滋賀シアターアーツトレーニングセンター)

◆施設の基本情報

建築年度	1987 (昭和62) 年度
廃校年度	2008 (平成20) 年度
活用開始年度	2018 (平成30) 年度
改修にかかった費用	約0.9億円 (うち自治体負担: なし)
改修に際して利用した国の補助金制度	なし
活用後施設名	滋賀シアターアーツトレーニングセンター
活用事業者名	ユースシアタージャパン株式会社 (有償貸与)
利用者数(年)	約5,000名
主な利用者層	4歳から22歳までの若者



◆施設の概要

ユースシアタージャパン株式会社 (YSJ) は、4歳から22歳までの若者を対象にダンスや歌、英語などをレッスンし、ミュージカルやコンサートで活躍する若者を育成している団体である。

当該施設は、YSJ所属メンバーや連携する学校の演劇部やダンス部などの研修 (合宿) 施設として活用している。

既存の教室や体育館をスタジオや宿泊できる施設に改修し、近畿や中部圏から研修生を受け入れている。

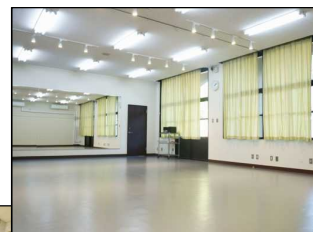


◆廃校活用までの経緯

2017 (平成29) 年9月に文部科学省「みんなの廃校プロジェクト」の閲覧をきっかけに現地見学を経て、活用提案を受ける。

2017 (平成29) 年12月に審査委員会を開催し、活用提案のプレゼンテーションを受け採用を決定する。

2018 (平成30) 年4月から貸付を開始し改修工事に着手され、同8月に「滋賀シアターアーツトレーニングセンター」としてオープンする。



活用に成功した理由

旧政所小学校は、130年以上の歴史のある学校であり地元の皆さんにとって非常に思い入れのある小学校である。

全国の数多くの自治体で課題となっている少子高齢化が進行しており、本市として地域活性化策に取り組んでいる状況の中で提案があった。提案内容として、4歳から22歳の若い世代の方々が利用され、地域に活気が戻ることにより期待している。提案事業者と本市の活用の方向性が一致したことが活用に至った理由であると考えている。

活用決定までの課題・苦労したこと

課題や苦労などは特にないが、周辺自治会への地元説明は提案事業者と共に進めた。



◆廃校活用に関する独自の取組

今後、地元住民の皆さんを対象に施設の内覧会や発表会を予定されている。

施設の維持管理 (除草等) やお弁当の提供などを地元をお願いすることにより雇用の創出や地域の活性化に寄与していただく予定。また、大規模災害時には、一時避難施設として提供をしていただく予定である。

旧政所小学校の近くに奥永源寺の拠点施設である「道の駅 奥永源寺溪流の里」があり、その施設との連携も図れるのではないかと考えている。

◆廃校活用のメリット

若い方々がリニューアルされた旧政所小学校に集うことで地域に活気が戻ると考えている。

施設スタッフや利用者からの声

学び舎である小学校を利用した、日本でも類を見ないトレーニング施設です。自然だけでなく、設備にも恵まれた環境の中で普段とは違った創作や自己表現ができる場となっています。地域をますます活気づかせ、新たに皆さまで愛される「滋賀シアターアーツトレーニングセンター」でありたいと強く願っています。

ユースシアタージャパン(YTJ)公式ホームページ：
<http://www.ytj.gr.jp/>

自治体の声

文部科学省の「みんなの廃校プロジェクト」に応募したことをきっかけとして、本市の力だけでは解決できない課題が解決に向け進みつつあります。まさに、地方創生の大きな目標であります地域の活性化や地域に活気が生まれるよう今後もサポートしてまいりたいと思います。

むろとし しいな 高知県室戸市 旧椎名小学校 水族館として活用（「むろと海の学校」）

◆施設の基本情報

建築年度	1983（昭和58）年度
廃校年度	2005（平成17）年度
活用開始年度	2018（平成30）年度
改修にかかった費用	約5.5億円 （うち自治体負担：約3.1億円）
改修に際して利用した国の補助金制度	空き家対策総合支援事業補助金 （所管：国土交通省）
活用後施設名	室戸市海洋生物飼育展示室 むろと海の学校 （愛称：むろと廃校水族館）
活用事業者名	室戸市 （指定管理者：NPO法人 日本ウミガメ協議会）
利用者数（/年）	約12.5万名（2018年4月～12月）
主な利用者層	観光客、ファミリー層等



↑ プールにウミガメが泳ぐ。



◆施設の概要

2006（平成18）年3月に廃校となった旧椎名小学校を改修しミニ水族館として再利用した施設です。室戸の海域で生息し、獲れる海洋生物の飼育・展示・研究を行っています。（約50種類1,000匹以上）飼育魚類・ウミガメ等への給餌、測定体験など、見るだけでなく海洋生物と触れ合える水族館として活動している。

◆廃校活用までの経緯

地元住民からの要望やNPO法人からの提案等を受け、2015（平成27）年6月に地域住民、民間団体、県及び市職員を委員として、「旧椎名小学校活用検討委員会」を立ち上げ施設の有効活用について協議・検討を重ねてきた。

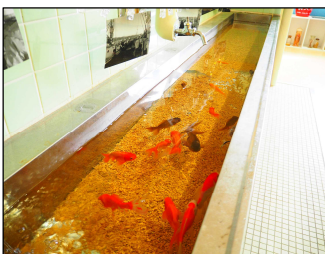
施設等の設計業務を2016（平成28）年2月に着手し同年7月に完成。改修工事等については、2016（平成28）年12月に着手し2018（平成30）年3月に施設が完成した。



← 跳び箱の中が水槽に。



↓ 廊下の手洗い場に金魚が泳ぐ。



活用已成功した理由

廃校の利活用についてホームページ等で意見の募集を行い、2014（平成26）年8月に以前から室戸市においてウミガメ等の調査研究を行っていたNPO法人日本ウミガメ協議会から博物館や水族館に利用してはどうかとの提案があった。また、地元の椎名地区住民からは、集会所や避難所、高齢者の活動の場として利用したいとの要望があった。

活用決定までの課題・苦労したこと

事務的には、予算の確保や財源確保、設置及び管理条例の制定、年間目標来館者数の設定などに苦慮した。
地元住民の方々には、廃校となった施設を有効活用するためご尽力、ご協力をいただくことができた。
また、過疎化が進み子どもの声が少なくなった当該地域に再び子ども達の声が聞こえる様になった事大変喜んでくれている。

◆廃校活用に関する独自の取組

徹底した効率運営。HP・ブログ・Facebook等の内容が重複しやすい情報はTwitterでの発信に一本化。イベントはポスター・チラシをつくらないことで時間を有効活用。プレスリリースは基本的にせず、メディアを呼ぶのではなく、メディア側から来るスタイルを目指す。

◆廃校活用のメリット

25mプールを大型水槽として利活用する事ができ、本施設の一番の魅力的な展示スペースとする事が可能となった。
また、学校の雰囲気を残しながら懐かしさや親しみを感じることができる施設として整備することができた。

自治体の声

水族館としては、円形大型水槽3基、小型水槽16基、屋外水槽1基（25mプール）であり、水槽の数も少ないが、指定管理者であるNPO法人日本ウミガメ協議会の努力や上手な演出のおかげで、当初年間来館者を4万人と計画していたが、オープン約半年で10万人を達成し、全国的にも廃校を利活用した施設として注目を浴びることができました。



廊下に水槽が並べられている

施設スタッフや利用者からの声

基本的に水槽用のクーラーやヒーターを使用しない最低限のシステムに合わせ、水温の高い夏は夏の魚、冬は冬の魚を展示。その結果、季節ごとに展示が異なり、リピーターの獲得とローコスト運営へと結びついている。

栃木県大田原市 旧蜂巢小学校 障害者福祉施設として活用（ヒカリカフェ）

◆施設の基本情報

建築年度	1932（昭和7）年度
廃校年度	2012（平成24）年度
活用開始年度	2014（平成26）年度
改修にかかった費用	約7千万円（うち自治体負担：なし）
改修に際して利用した国の補助金制度	なし
活用後施設名	hikari no café 蜂巢小珈琲店
活用事業者名	大田原市立小中学校後利用（無償貸与）
利用者数（/年）	約3万名
主な利用者層	市内外・県内外、地域住民



◆施設の概要

「hikari no café 蜂巢小珈琲店」は、2012（平成24）年度末で廃校となった旧蜂巢小学校を活用し、社会福祉法人によって多機能型障害福祉サービス事業所としてカフェの運営、珈琲豆・焼き菓子等の販売を行っている。また、カフェスペース以外の教室群（ギャラリー）・体育館・音楽室・家庭教室では地域の方々によるギャラリーやワークショップの開催、コンサート・サークル活動での利用があり、校庭ではグラウンドゴルフや地域のお祭りなど幅広く利用されている。市内外・県内外を問わず多くの方が訪れており、地域の賑わい創出へも大きく貢献している。

◆廃校活用までの経緯

旧蜂巢小学校は2012（平成24）年度末で廃校となり、本市では民間事業者による利活用を検討していたため、翌年7月に公募型プロポーザル方式によって利活用事業者を募集。就労移行支援事業・就労継続支援事業や「hikari no café 本店」の運営をはじめとした社会福祉事業によって培われたノウハウを十二分に生かした提案を受け、社会福祉法人エルム福祉会を利活用候補者とし、契約を締結。同法人による施設全体のプランニングやカフェコンテンツに関する詳細な検討を含む校舎の改修等の準備期間を経て、2016（平成28）年4月26日から事業開始。



活用に成功した理由

成功した理由としては、市と事業者の利活用に関する意向が一致したこと、極力学校としての風情や魅力を残したまま事業を実施し、魅力的なコンテンツと合わせて集客に繋がっていることが考えられる。旧蜂巢小学校が廃校となった当時、社会福祉法人エルム福祉会では既存の事業所における新規受入が困難であったため、障害を持つ人々の働く場・日中活動の場を新たに確保し、より一層地域福祉へ貢献するために廃校を活用した事業展開を検討した。現在では珍しい木造校舎の趣や広がる田園風景に立地されている環境を生かし、校舎外観は昔の校舎の姿を残したまま、内装もカフェ部分以外の旧教室群などは当時の教室の状態をそのまま受け継いでいる。

活用決定までの課題・苦労したこと

本市では2010～11（平成22～23）年度にかけ、統廃合のために小中学校4校が廃校施設となることに伴い、「大田原市廃校校舎利活用庁内検討委員会」を組織。廃校が立地している地区毎の座談会の開催による住民意向の把握や、検討委員会ワーキンググループによる調査検討結果などから、うち3校は民間事業者による活用を検討する方針となった。旧蜂巢小学校は2012（平成24）年度末で廃校となったが、検討委員会での方針を踏まえて民間事業者による活用を検討することとし、翌年度に公募型プロポーザル方式による利活用事業者募集へと至った。

◆廃校活用のメリット

本利活用に関しては、地域や学校の卒業生の方々の「母校を残したい」という愛着・思いを汲み取った民間事業者によって活用されることで、地域との交流も活発で、かつ県内外から多くの方々の来訪に繋がっている。ギャラリー・校庭などは地域の方々を中心となり利用されているため、人口減少が進む地域の活性化・賑わい創出に大きく貢献している。また、障害者就労支援施設としてカフェ等の運営を行っているため、地域雇用の創出にも大きく貢献している。さらに、市の公共施設マネジメントの面から見ても、民間事業者による運営のため、市の維持管理費用の削減に繋がっており、ファシリティマネジメントとしても非常に効果的な取り組みとなっている。

自治体の声

現在、本市においては廃校施設が9校あり、うち6施設は民間事業者や市によって利活用されています。旧蜂巢小学校の「hikari no café 蜂巢小珈琲店」は、地元根付いた事業者によって、学校として運営されていた当時の趣を残したまま多くの人々に愛され、かつ賑わい・雇用の創出など、本市の地域課題の解決へも繋がる施設として年々利用者が増加しています。少子高齢化により、今後も廃校施設をはじめとした遊休施設が増加する可能性があります。現在活用されていない施設も含め、地域の方々や民間事業者等と協働し、引き続き取り組みを進めてまいります。

施設スタッフや利用者からの声

当店は、「Nostalgic + Modern」をコンセプトとし、心地よいヒカリ（癒しの空間）とコーヒーの「カオリ」（くつろぎの時間）を、お楽しみいただけます。旧蜂巢小学校の木造校舎の雰囲気や味わい、地元食材を使ったランチで、「穏やかなひととき」を満喫できます。障がいを持ったスタッフも一人一人が、ゆっくり・丁寧に・そして穏やかに接客をさせていただいております。また、店内奥にはギャラリースペースがあり、地域の写真家・画家などの展示スペースがあり、様々な芸術を楽しむこともできます。

千葉県南房総市 旧七浦幼稚園・七浦小学校 診療所として活用（「ななうら」）

◆施設の基本情報

建築年度	2001（平成13）年度
廃校年度	2013（平成25）年度
活用開始年度	2015（平成27）年度
改修にかかった費用	約2.9億円（うち自治体負担：約0.6億円）
改修に際して利用した国の補助金制度	なし
活用後施設名	「ななうら」（七浦診療所、ななうら横丁かへべえ〜・かへべえ〜、七浦薬局スマイル）
活用事業者名	医療法人社団 桂・有限会社スマイルファーマー・NPO法人ななうら（有償貸与）
利用者数（/年）	約2万名
主な利用者層	年齢、性別問わず利用（高齢者の方が多い）

◆施設の概要

- ・2017（平成29）年11月27日移転開院
- ・医療・介護・病児保育施設及び地域コミュニティスペースの提供・日用品販売
- ・七浦診療所（内科、老年内科、脳神経科、整形外科）、ななうら居宅介護支援事業所、通所リハビリテーション、病児保育室そらまめ、ななうら横丁かへべえ〜・かへべえ〜（惣菜・日用品販売）、七浦薬局スマイル

◆廃校活用までの経緯

広報みなみぼうそう及び市のホームページにより、利活用のアイデアを募集したところ3件の提案があり、提案のあった3件について、「七浦幼稚園・小学校利活用検討委員会」（地元組織）が提案者から説明を受け検討した。

その後、七浦幼稚園・小学校利活用検討委員会から七浦診療所の提案を採用したいという要望書が市に提出され、公有財産活用検討委員会（市内部組織）が七浦診療所から説明を受け検討した結果、廃校活用が決定した。



↑ 待合室



← リハビリ室



↑ 多目的スペース



↑ キッズスペース



← 惣菜売り場

◆廃校活用に関する独自の取組

利用者が集まりやすく、医療、食、介護、保育等生活する上で不可欠な機能をまとめて提供できる施設である事を目指す。

当敷地内の体育館が避難所となっており、同敷地内に消防団の詰所も設置されている。医療施設として七浦診療所があり、今後介護施設が併設されることにより福祉避難所としての役割を持ち、発災時は地域の災害活動の中心ともなる。

認知されるためにイベントを開催。ボランティア有志による「すばる」を主体として夏に盆踊り（地元住民の有志による模擬店、踊り）、冬にはクリスマスパーティーを開催（職員有志によるハンドベルやクリスマスメニューの惣菜）。地域住民を中心に多くの方が集まり盛況を収めた。

◆廃校活用のメリット

小学校施設は元々が地域の中心であり、子どもの時通っていた地域住民にとっては通いやすい立地。また土地勘があることから、高齢者でも違和感なく利用できる。

敷地も広く開放的であるため、集まりやすい環境となっており子どもにとっては放課後遊ぶ場にもなる。

また元々広域避難所であるが、旧七浦小学校の場合、同施設内に消防団の詰所、医療施設として今回の七浦診療所を併設することとなり、有事の際には地域の中心に位置する立地で災害活動の拠点にもなる。

廃校時に新設校には移動しなかった写真が多数あり、閲覧できる図書室は訪問した卒業生が当時を懐かしむ場になっている。

活用に成功した理由

七浦地域は少子高齢化が進み、交通手段の問題や商店の減少による買い物弱者の増加など、過疎地域に特有の課題を抱えている。そのような状況下において地域に医療、生活、介護の機能を集約した施設を整備し、生活の利便性を向上させたいとの思いを持ち、医療法人、市、地元住民が協力し、旧小学校施設に改修を加え利活用するに至った。

小学校とは元々地域のコミュニティの中心であり、前述の思いを実現する場所としては最適な施設であると考えられ、減少しつつあった地域内のコミュニケーションを活性化する上で、年齢や利用する目的を問わず大きな役割を持つことが期待される。

活用決定までの課題・苦労したこと

利活用に際しては、地域との連携面で七浦地区内の各区との話し合いが重要である。少子高齢化の進む小さな地域での事業であるため、地域の協力が不可欠となる。一企業である医療法人単独では難しい事業と考えられるため、利活用に向けて地域との話し合いを重ね、地区の総意という形で利用が決定した。その後の話し合いの場にも各区長に参加していただく機会を設け、また法人から都度、区の総会等に出向いて説明を行った。

長期間での事業となるため年度をまたぐ、担当する部署の変更等があると詳細な話を進めていく上では弊害となる恐れがあるため慎重なコミュニケーションが必要になる。

施設スタッフや利用者からの声

小学校が改築されてから15年程しか経過しておらず、外観はたいへん近代的であり、この度の改装工事はそれに合わせて設計したため、施設外観や施設内部はきれいで清潔感がある。しかし、経年劣化している部分はあり、排水管の詰まりによる異臭、施設各所での雨漏り等実際に使用してみたら発覚する問題も多い。

「診療が終わった後に買い物ができるのは嬉しい」、「放課後に勉強できる施設がある」等との意見がある一方、「空間が広いので、利用に際して光熱費がかかり経費がかさむ」や「敷地が広いので歩いて移動するのが大変」等の意見がある。

自治体の声

少子高齢化の進む地域において、医療・介護はもとより、買物等をはじめとする生活の利便性の向上に施設利用者からは、喜びの声が聴かれる。

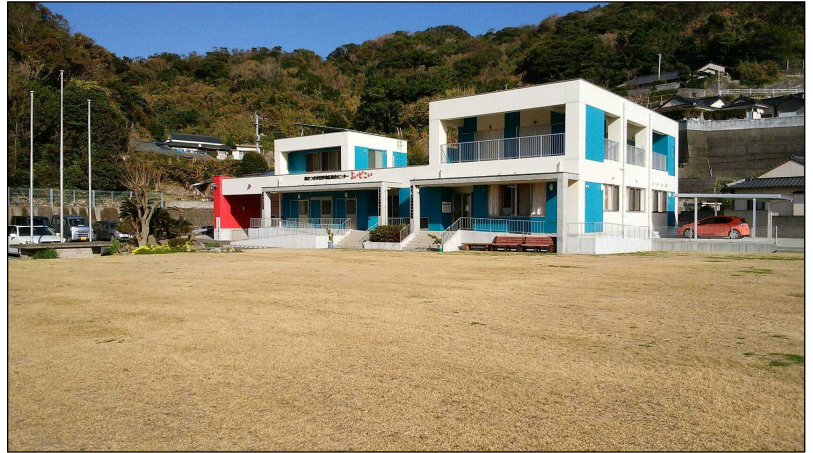
地元組織による活用検討委員会や、その後も地域との話し合いの場に積極的に参加するなど、NPOや、ボランティア団体等地域ぐるみの活動がなされている。

施設の老朽化は、単に経年によるもの以外にも、立地や建物構造により左右されるため、廃校活用の際は、事前確認を十分に行う必要がある。

鹿児島県南さつま市 旧笠沙小学校 医療施設として活用（「よいどこい」）

◆施設の基本情報

建築年度	1974（昭和49）年度
廃校年度	2013（平成25）年度
活用開始年度	2015（平成27）年度
改修にかかった費用	約2億円 （うち自治体負担：約1.6億円）
改修に際して利用した国の補助金制度	へき地診療所施設整備補助金（所管：厚生労働省）等
活用後施設名	笠沙地区総合センター「よいどこい」
活用事業者名	南さつま市（転用）
利用者数（年）	約1,800名
主な利用者層	地域の60～70歳代の住民等

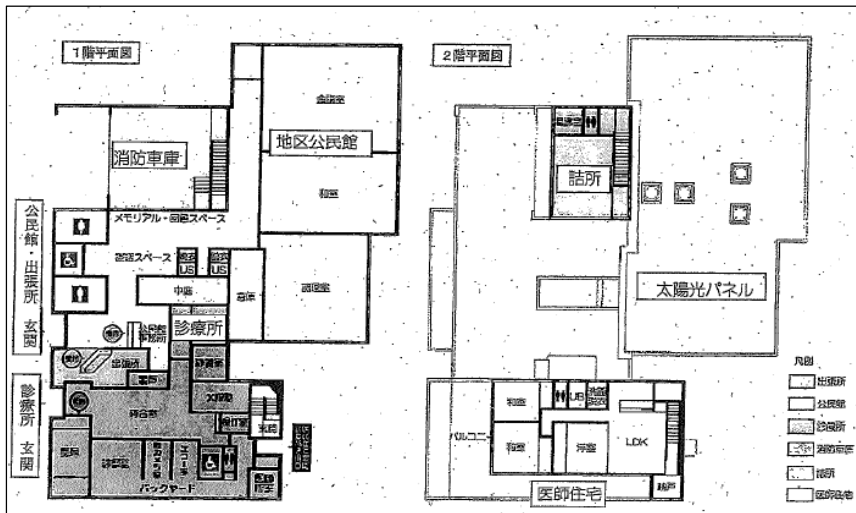


◆施設の概要

南さつま市笠沙支所野間池出張所、南さつま市野間池診療所、南さつま市笠沙地区公民館、南さつま市野間池分団消防車庫及び詰所、南さつま市野間池診療所医師住宅の複合施設として笠沙地域住民のよりどころ⇒「よいどこい」（鹿児島弁）として、地域コミュニティの場となっている。

◆廃校活用までの経緯

2014（平成26）年4月に学校再編により笠沙小学校が閉校となることに伴い、地区民共通の財産・人的資源である学校跡地を有効活用するため、跡地利用検討を行い、もともと野間池診療所・出張所の建物老朽化や地区消防詰所・車庫の整備や避難所などが懸案となっていたこともあり、学校跡地利用を契機として、多目的施設を整備して欲しいとの要望があがった。



もともと旧小学校の校舎は平屋建てだったが、「よいどこい」開設にあたり、2階部分を増築。

活用成功した理由

2010（平成22）年3月に校舎の一部を地区公民館として使用していたこと、1951（昭和26）年のルース台風で高潮被害により尊い生命・財産を失う被害を受けた歴史もあり、第一避難所指定場所でもある閉校跡地に消防詰所・車庫・避難所として使用できる施設を整備することは防災上からも大きな必要性があった。

活用決定までの課題・苦労したこと

校区8自治会において、総会等の中で協議を深めて同意を得ていき、校区の振興協議会内に学校跡地利用検討会、同作業部会が組織され意見集約が図られた。

◆廃校活用のメリット

学校は地域のシンボルでもあり、校舎を一部でも残して活用することは、地域の歴史を残すことでもあり、卒業生や地域住民にとっても、地域への愛着や誇りを醸成することにもつながる。また、地域に密着した事業を展開する際、地域の理解が得られやすい。

自治体の声

近年、統廃合する学校が増える中、閉校した学校は老朽化が進む一方です。こうした中、閉校した学校を活用することで、地域のシンボリックな学校が、再び輝きを取り戻すことが出来ます。閉校した学校が、今後は地元の「顔」として更なる地域コミュニティの活性化、発展に繋がることを期待します。

施設スタッフや利用者からの声

地域の中で、一番賑やかな場所だった学校から、子どもたちの声が消え、思い出の強い校舎もほぼ無くなり、地域住民は寂しく思っていました。そこに、診療所や主張所・地区公民館が建設され、グラウンドも全面芝生に変わり、学校程の賑わいは無いものの、地域住民がグラウンドゴルフをしたり調理室で郷土料理を作ったり憩いの場所として生まれ変わったことに喜びの声が聞こえてきます。今後、学校再編等で閉校となる学校が出てくると思いますが、地域に合った再利用を地域住民と行政が一丸となって創り上げて頂きたいと思います。